

「イメージ共有」を指向した 生涯学習システムの構築 —自己組織性の視覚から—

田 中 美 子
(千葉商科大学)

1. 問題意識

近代社会の合理化過程としての官僚制機構の肥大化や、行き過ぎた管理機構のひずみが表れつつある。企業の倒産は増え、これまでの終身雇用制も崩れ始めた。従来型の管理システムは限界を露呈し、規制緩和や管理を緩める反制御のシステムが模索されている。産業社会が高付加価値を求める中で、自己組織性を内包した脱管理システムへのパラダイム転換が必要である¹⁾。これは生涯学習の領域でも例外ではない。この「自己組織性」を内包したシステムをいかに構築していくか、が20世紀に生じた生涯学習の課題である。本論では、この「自己組織性」と「イメージの共有」をキーワードに、生涯学習と地域活性化の関係を考察する。

2. 地域の自立、地域の責任

地方自治法は施行から50年以上が経過し、中央集権型行政システムの制度疲労により、「地域のことは地域自らが行う」という分権型社会に向けての胎動が始まった。地方分権による権限の自治体への移管は、自治体が自己決定し、実行したことについてのリスクと「責任」を負うことを意味する。

1998年3月に策定された第五次全国総合計画にあたる「21世紀の国土のグ

ランドデザイン」においても、参加と連携をキーワードに、「自立の促進と誇りの持てる地域の創造」が打ち出され、地域連携軸の形成が地域政策の目標として設定された。少子高齢化によって地方自治体の従来型の定住人口増政策は限界を呈し、かつての施設先行型計画から内発的なまちづくりへの転換の必要性に気付き始めた地域は多い。立派な美術館、文化ホールなども、限られた財源の中で採算や効率が重視されるようになると、フルセット主義の排除、すなわち近隣の市町村における施設の相互利用を進めざるを得なくなる。

こうした中で交流人口による活性化を目指す地域では、住民はもちろん、観光客などからも「選ばれる」必要があり、その選択には地域イメージが重要な規定要因となる。しかしながら、「イメージ」とは実態から人の頭脳の中に投影される²⁾ ものなので、政策として直接的にこれを制御するのは困難を伴う。地域イメージが住民に自己組織的に共有されていく過程をサポートするのが行政に求められる役割である。このような住民の認識のレベルにおけるイメージの共有の過程は、実態としての住民の自発的な文化活動の促進に寄与する。ここに、生涯学習が地域の活性化に寄与する可能性を見出せる。

3. 地域が「学習」する、地域を「学習」する

社会を生命体に擬する議論は社会有機体説に始まるが、そこでは社会的分業を有機体の各器官の機能分化とその相互依存になぞらえて捉えるところに中心があった。ここでは有機体が自己組織化の可能性によって特徴づけられるという点から地域社会を考える。すなわち、人間の集団からなる地域を可塑性を備えた一種の有機体と考えるならば、地域は自己組織的に進化・発展する。一般的に、有機体の発展は2つの学習プロセスからなると考えられる。すなわち、「教唆的学習 (supervised learning)」と「非教唆的学習 (unsupervised learning)」である。前者は、ある、あからさまな教示に基づく学習のプロセスであり、後者はシステムと環境との相互作用に基づく、あからさまでない指示によるもので、いわゆる自己組織化のプロセスである³⁾。

生涯学習は、学習者の主体性と学習ニーズを基本とする。渋谷英章は、生

涯学習は学習者自身のなかに主体性や学習ニーズを形成するプロセスそのものを含む点を指摘している⁹⁾。この生涯学習の特質は、学習自体が自己組織性のプロセスを内包しているという意味において、「非教唆的学習」の側面をもつ。

地域の「学習」とは、情報構造における秩序化・変化である。必ずしも物質的な変化とは限らない、まちにおける情報量の変化であり、地域の情報の受発信によって地域は「学習」する。すなわち、教唆的学習と非教唆的学習の相乗効果によって、「学習」の度合いが規定される。地域のイメージ形成過程は、この文脈でいう地域の「学習」の過程であり、計画や政策（教唆的学習に相当する）に自己組織化現象を取り込むことが重要である。イメージの自己組織化は非教唆的学習に対応する。

地域のイメージを議論する際に、この自己組織性の視点は重要である。なぜなら、イメージする主体である住民に対し、行政が上からあるイメージを強制するというのはほぼ不可能であるからだ。定められた目標に向かって邁進する、効率を第一義とする機能主義的な考え方では、イメージをよくすることはできない。下水道整備率のように、達成率が予め明確ではないし、そのこと自体が自己目的ではないからである。

4. 関心が高い地域イメージ関連施策

バブル経済時代には、広告代理店依存型のCIが各地で展開され、ロゴタイプやマークなどが制定された。（財）地域社会研究所の助成を得て全国調査をした結果⁹⁾、バブル経済崩壊後も、地域イメージに対する自治体の関心は依然として非常に高く、「非常に関心がある」、「関心がある」自治体は合わせて約9割である。イメージ関連施策を「過去5年以内に実施」が3割、「現在行っている」が過半数で、このうち82.2%が地域の将来ビジョンを示す総合計画に位置付けられている。

注目されるのは、誇り・愛着のある地域では「地域イメージ」に関心が高く、地域イメージ関連施策を早くから実施しているという結果が得られたことである。ここから、「誇り・愛着」と「地域イメージへの関心」、「イメー

「地域イメージ形成の促進」は螺旋構造状に地域の内発的なまちづくりに寄与していることが考えられる。換言すれば、地域イメージ関連施策の展開が、地域の構成要員の自地域への誇り・愛着を高め、「われわれ感情」を産み出す可能性が示唆される。ここに、現実を照らし出す装置としての「イメージ」を媒介にして、住民の認識レベルの問題に、行政が関与する手がかりが見えてくる。

5. イメージ・ダイナミクスモデル—イメージ形成の理論

私はイメージ形成過程を記述する「イメージ・ダイナミクスモデル^①」を提唱している（図1）。これは地域の実態を投影した対内的イメージ（地域内で保有するイメージ）が対外的イメージ（地域外で保有するイメージ）とイメージ間相互作用を繰り返し、地域外からの評価の影響を受けながら、対内的イメージのうち構成要員に共有された優勢なイメージが地域アイデンティティとして確立していく、とする理論である。この地域アイデンティティに誇り・愛着を持てる場合には、ポジティブ・フィードバックによって地域の実態を変容させ得る。ここで提唱する「イメージ・ダイナミクスモデル」は、地域イメージの自己組織化を通して地域アイデンティティが確立され、地域実態が政治・経済レベルにおいても変容していくプロセスを説明する。

このモデルで説明できる事例として、長野県飯田市の「いいだ人形劇フェスタ」が挙げられる。これは、伝統的人形劇や市民の生涯学習活動などの地域資源を基盤にして、22年前に始まった人形劇のイベントで、全国から人形劇人が集い、メインストリートや神社の境内など、市内各地が人形劇の分散会場となる。予算をさほどかけなくても、魅力あるところに人は集まる。その意味では、飯田は人形劇人に「選ばれた」ことになる。10年経過した時点で初めて人形劇場が建設されたことから、このイベントが施設先行でなかったことがうかがえる。この住民参画型の文化活動は、今では「世界に輝く飯田の個性」として市の総合計画の重点プロジェクトに位置づけられるまでにオーソライズされた。文化活動など住民のアクティビティがポジティブ・フィードバックを通して成熟化するにつれ、別のループである産業、地方自

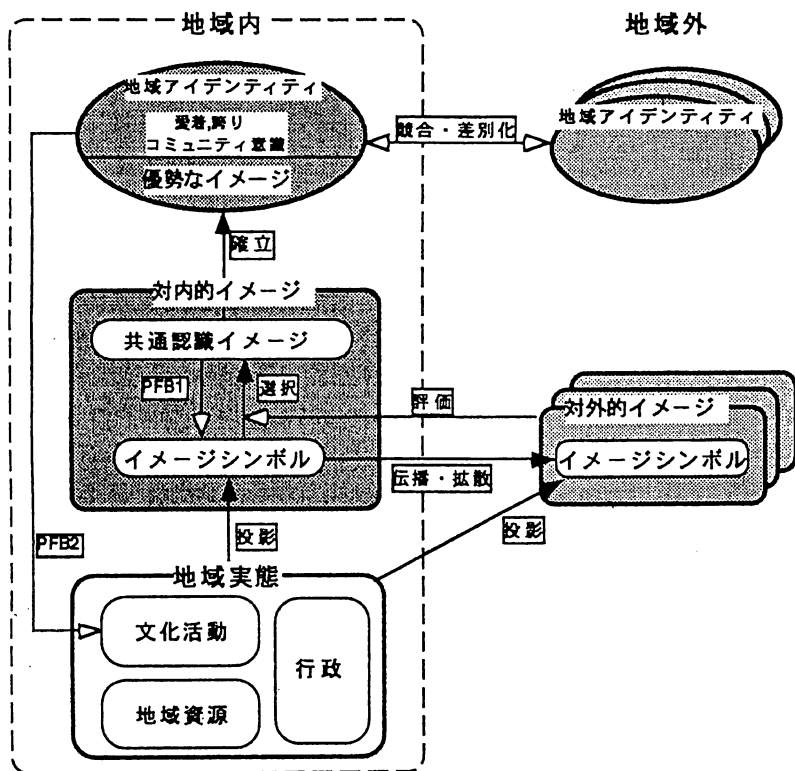
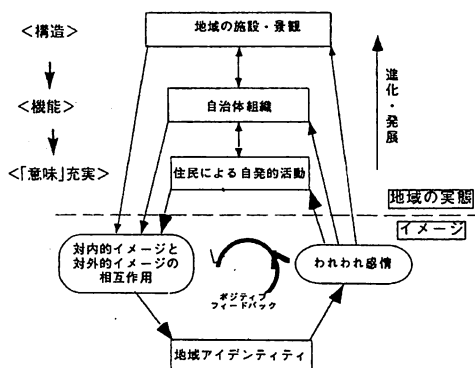


図1 イメージ・ダイナミクスモデル

出所：田中美子（1997）『地域のイメージ・ダイナミクス』技報堂出版。

治行政など地域の実態にその効果が波及していく。すなわち、この自己組織化のプロセスは、イメージという認識のレベルから目に見える実態のレベルに向かって、重層的な地域発展がみられる（図2）。飯田市で当初社会教育の一係で始まった人形劇のイベントは、地域内外にイメージ共有のシンボルとして浸透し、現在は横系的に各部署の施策に展開されている。このような自己組織的な施策の方向を、「イメージ共有指向型計画」と呼ぶ。

しかしながら、ここで提唱するイメージ共有指向型計画が成果を挙げるまでには、施設先行型の計画に比べて長い時間を要する。従って地域活性化の担い手が高齢化したり、情熱が持続しなかったり、といった問題は多くの地



イメージ・ダイナミクスモデルのサブ・システムとして、地域イメージの自己組織化と、地域の実態の要客の関係を記述した。

図2 ポジティブフィードバックに基づく地域発展の重要性。

出所：田中美子（1997）『地域のイメージ・ダイナミクス』技報堂出版。

見直す契機となった。当時鹿島町には住友金属という下部リーグに所属していたチームがあっただけで、今ほどサッカーへの関心が高い地域ではなかった。ところが1993年Jリーグ開幕によって対外的には「アントラーズのまち」というイメージが強く形成され、それが対内的イメージに評価を与え、実態が整備された。鹿島町では、現在2002年の日韓ワールドカップ成功に向けての準備が進められているが、アイデンティティが完全に確立したといえるには、まだ時間が必要であるとの指摘がある⁷⁾。また、20年以上前からサッカー熱が高く、サッカー王国と言われている静岡県清水市ですら、現在、やっと当時の子供たちがJリーグや日本代表を経て地元に戻ってきた段階である。実態とイメージの相互作用によって活動が地域に定着するには時間がかかるのである。

特にイベント型の場合、ルーチンワーク化することは、同時にマンネリ化の危険をはらみ、緊張感を持続させるのが難しくなる場合が多い。飯田市の場合は、当初人形劇人が無償で演じていたが、各劇団の判断で、一部は有料化した。その背景には、お金を払っても観たいレベルを確保したいと願う劇団と、有料でもいいものを観たいという市民との、いい意味での緊張関係が

域が直面する課題である。全国の先進事例と呼ばれる地域でも、対外的に高い評価を得、それによって地域住民が当該地域に自信と誇りをもてるようになるまでには、長い胎動期が存在する。

茨城県鹿島町の場合は、スタジアムの建設、元ブラジル代表選手の入団など当初行政主導できっかけをつくったが、新たなシステムが突然与えられたことにより従来の共同体にエネルギーが生じ、またそれが既存の共同体システムを

ある。また、実行委員会体制として市民 70 人のボランティアが参画した。これは成熟した市民の盛んな生涯学習活動を基盤とするものである。

このように、あるシステムが地域に定着していくためには、内外のポジティブ・フィードバックが必要であるが、定着後にシステムが沈滞化した場合には自ら意図的にゆらぎをつくり、活性化を図っていく必要がある。それが飯田市の場合には、推進体制の見直しや 20 年間使用していた「人形劇カーニバル飯田」の名称変更であったりするのである。興味深いことに、イメージの浸透と共有は、自らゆらぎを生み出す活力をも、もつのである。

6. まちづくりにおける「地域学」の可能性

前節 3. で述べたように、「地域を学習する」ことにより「地域が学習する」という側面を看過することはできない。市民主導型の地域学、「横浜学」を考える会をはじめ、東北学、山形学など近年全国各地で「地域学」が盛んであるが、そのまち「らしさ」追究のひとつの方策になると考えられる。

これは、地域そのものを学習し、研究しようという動きであり、生涯学習のまちづくりに通じる。地域学を「地域に関するあらゆる情報の受発信により、住民と地域がポジティブ・フィードバックにより学習していく住民参画型の文化活動」⁹⁾と捉えれば、イメージ・ダイナミクスモデルを具現化したものと位置付けられる。ここでは、地域学への参画により、地域への愛着、誇り、コミュニティ意識が高まり、地域の文化活動が活発化していくという効果が期待される。

7. 今後の方向性

公民館や生涯学習センターなど施設の量的整備（構造）も重要ではあるが、そこではより効率的な学習方法やプログラムの開発など、ソフトの施策（機能）が求められる。そしてこれらが充足されると、人々の学習ニーズは主体的参画への喜びや自己実現といった「意味」の充足へと、螺旋状に向かって

いく。良い地域イメージは、いわば付加価値であり、「意味」である。すなわち、その地域に住む（あるいは訪れる）必然性を問うものであり、地域の個性やアイデンティティが意味をもつ理由である。地域アイデンティティとは、つまるところ、その地域「らしさ」の追究から醸成される。今後は、物理的な構造を重視する施設先行型計画から、住民の参画、自己実現など「意味」の充実を求めるイメージ共有指向型計画への転換の必要性がより高まるであろう。

21世紀に残された課題として、地球環境問題や男女共同参画型社会の実現など、法制度や規制の整備（教唆的学習）だけでは解決できない現代的課題が山積している。これらの課題はいずれも、消費の場面やごみの分別、雇用環境における個々人の行動を規定する認識や理解、イメージや意識の変改が不可欠である。過度に管理的でなく「支援」的な形で、個々の差異を認めながら共有し得るイメージと全体の方向を示すことが重要である。今後は、自己組織的なイメージの共有（非教唆的学習）を促進し、共通認識をもってこれらの問題解決に資する糸口を模索するための生涯学習システムの構築が大きな課題であろう。

注

- 1) 今田高俊「自己組織性論の射程」(『組織科学』28(2),1994, pp.26 - 27)
- 2) 田中美子『地域のイメージ・ダイナミクス』技報堂出版, 1997, p.20
- 3) 田中繁「大脳皮質神経回路の自己組織化に対する数学的理論」(『脳とコンピュータ 5 - 脳・神経系が行う情報処理とそのモデル』松本元, 大津展之共編, 培風館), 1990
- 4) 渋谷英章「生涯教育から生涯学習への転換の意味」(『日本生涯教育学会年報第 20 号』), 1999, p.9
- 5) 田中美子『地域イメージ関連施策の現状』(財)地域社会研究所助成研究報告書, 1997
- 6) 田中美子「地域イメージの形成過程に関する研究」東京工業大学博士号学位論文, 1996
- 7) 田中美子・高橋義雄「イメージの共有で学校は開く」(『悠』ぎょうせい, 2000 年 7 月号) pp.12 - 17
- 8) 「地域学」については、田中美子「まちづくりにおける『地域学』の可能性—イメージ・ダイナミクスモデルからのアプローチ」(『社会教育』52(1), 1997, 廣瀬隆人「地域学と生涯学習—地域学の方角を探る」同誌参照。